

青山学院高等部出身短大卒業生 聞き取り調査のまとめ －1959（昭和34）年から1964（昭和39）年卒まで

山田 美穂子

はじめに

青短同窓会の会員の中でも高等部卒業生の占める位置は特殊であるかもしれない。彼女らの多くは比較的高学歴の両親と兄弟姉妹を持ち、必ずしも裕福な環境とは限らないが、女子教育を重要視する、いわゆる教育資本の豊かな家庭環境に育った。また異文化や宗教に比較的寛容である東京という都市の地の利を得て、キリスト教をはじめとする特定の宗教教育にもそれほど違和感を抱かずに、むしろ積極的にミッションスクールを選択した人が多い。実際インタビューを受けて頂いたこの6人の卒業生のうち、実家が仏教の寺院である人が2名、親がクリスチャンの人は1名、家は仏教だが母方にクリスチャンの知り合いがいた人が2名という宗教との親和性の高さは、地方出身者の家庭環境と大きく違う点であると思われる。

彼女ら当時の高等部卒業生の多くは青山学院高等部から大学もしくは短大へと進学したが、いずれに進んだ場合も「青山学院」への帰属意識が強いのが特徴である。短大を選択した場合、入学後は地方からの学生の中でマイノリティ側になるわけだが、彼女らはかえって地方出身の多くの学生たちにとっての一種の憧憬の的となったことはまちがいない、地方支部の卒業生への聞き取り調査報告からはそうした非対称的な関係性をうかがい知ることができる。

この報告書では6名（昭和34年卒1名、昭和36年卒1名、昭和39年卒4名）の高等部卒業生への対面インタビューを通じて得られた当時の短大教育の感触と、若い頃の彼女たちの目を通して見た東京と地方出身者との共通点や差異を概観する。そのことは戦後新生した青短の創成期に満ちていた教育者と学生との熱意や好奇心を再現することとなり、また高度経済成長期のとばりに立っていた東京に多くの有能な人材を輩出した、青山学院女子短期大学の歴史的意義を記録することにもなるだろう。

以下では質問項目別に6名の卒業生（本文ではプライバシー保護の観点から、それぞれ対応するアルファベットで表記する）の回答内容をまとめ、最後に考察を添える。

氏名	卒業年	学科	出身地／居住地
A	1959（昭和34）	家政	港区／船橋市
B	1961（昭和36）	国文	杉並区
C	1964（昭和39）	国文	板橋区
D	1964（昭和39）	児童教育	世田谷区
E	1964（昭和39）	児童教育	世田谷区
F	1964（昭和39）	英文	流山市

1. なぜ「青短」に進学したか（どのような理由で選択したのか）

a. Aさんの祖父は浄土宗大本山のひとつ増上寺にも出仕する高僧で、内村鑑三と交流のある人物であった。父は仏教の宣教師で満州やハワイへの活動に従事していたため、Aさんご本人は父の秘書となることを期待されていた。「お寺の娘」として華道・茶道・琴などの習い事を網羅し、短大卒業までには、全て名取の資格を取っていた。芝増上寺や実家寺院のある牛込周辺には神社も多く存在し、宗教を越えた精神的なコミュニティがあった。Aさんの祖父は「心根があれば何の宗教でも」よいとのポリシーがあり、当時実家の隣にあった牛込教会から毎日きこえてくる讃美歌に惹かれていたAさんに「頭を垂れる対象があるのは良いこと」と隣のキリスト教の教会に通うことを勧めた。5歳のとき空襲で牛込一帯は全焼し、実家の寺も牛込教会も消失したが、それまでの2年間通った牛込教会の真鍋頼一牧師が、のちに青山学院の理事長となられたのもご縁であった。

中3のとき父が急逝し、弔問にいらした真鍋先生と10年ぶりに再会した。近況を問われ新宿の戸山高校を受験予定である旨お話すると、「戸山高校を狙えるレベルなら青山学院も受けてみたら」と勧めてくださり、急きょ青山の高等部の受験を決めた。大学進学の際、兄二人（住職）は別として第二人には学費がかかることで母が悩んでいるのを見て、自分は四年制大学ではなく、当時「花の短大」と言われた青短への進学を決めた。また、もう父の秘書にならないのであれば英語は必要なく、むしろ生活のために家政が重要であると家政科を選択した。青山の四大は当時無試験だったが短大は入学試験があったこともプライドを高める効用があった。向坊学長の魅力も大きかったことは間違いない。

b. Bさんは両親がクリスチャンで、特に父が熱心な信者だった。実家は吉祥寺だが父が結婚前に都心に住んでいたことがあり、その縁でメソジスト系の銀座教会（1890年設立）に通う。両親とも当教会の吉岡誠明牧師から洗礼を受けており、結婚式もここで行われた。Bさんは4人兄弟姉妹で、そのうちBさんを含めた3人は母の勧めで青山の中等部に入学した（弟は慶應義塾の中等部に入学）。父は熱心な信者であるにも関わらず子どもの誰にも洗礼は受けさせていない。

姉は大学に進学したので自分も行くと思っていたが、高等部在学中に東急文化会館に「田中千代服飾専門学校」東京校舎ができた（1960年）ことが進路に大きく影響を与える。母が器用で服を全部自分で縫っていたため、Bさんもおしゃれに興味があった。田中千代

は当時の皇后の衣装相談役を務めたデザイナーで、その夫は田中薫子爵であり、服飾専門学校（1951年設立）の本拠地である兵庫県芦屋の「お嬢様が通う学校」に憧れた。姉は青山の大学（英文科）に行ったが、自分とはとりあえず短大には行き、その後田中千代服飾専門学校に通うという将来設計を立てる。進学にあたり、裁縫が主ではない家政科には行くことは考えず、ファッションに興味はあるものの勉強は苦手であったBさんは、文章を書くことは好きだったことから短大の国文科を選択した。当時短大に進学する人数は少なく、内部生はだいたい大学の方に行っていた印象を持つ。

c. Cさんは青山高等部の進路指導の際に「6歳から習っている日舞を続けたい」「日本文化を学びたい」と希望したところ、教授陣が素晴らしいという理由で青短を勧められ受験に至った。確かに当時の国文科には加藤楸邨（1954～74年）、川瀬一馬（1950～74年）、諸橋徹次（『大漢和辞典』編纂で1960年に文化勲章を受賞）などの錚々たる教師陣がいた。

家庭的には3人姉妹で、Cさんが青山高等部から青短、妹さんは一人が東京女学館から短大へ、もう一人は音大へ進んでいる。当時は高等部から青短へ進学する友人は多かった。自宅が九段下で、当時渋谷～水天宮を通っていた都電を利用しやすかったこともある。家は浄土宗だが、母の知り合いでクリスチャンである人が青短を勧めたことも影響した。

d. Dさんは当時の女子生徒の進路として大勢を占めていた「短大→就職→結婚」に沿って短大へ行くことは決めていたようである。親は大学でも良いと言っていたが、高等部のクラスからは短大進学が半数、次が大学・就職・高卒（勉強はもう十分なので家にいる）という分布だった。短大進学者では英文科志望者の数が多かった。しかしDさんは高等部時代に得意な科目が音楽・美術・体育だったことから当時開設したてだった児童教育に決めた。母には「やがては（大学の）英文科へ行かせる」つもりで青山中等部に入れたのに、と言われたとのことである。当時青山学院大学では理系の学科はまだなく、1962年にフランス文学科が創設されたばかりで、英米文学科と教育学科がメインであった。

e. Eさんの場合は、家庭における親の啓かれた教育観が進路に明らかに影響している。まだ中学受験する家が少なかった当時、建築関係の仕事についていた父の「後に残せるのは教育だけだから」というポリシーもあり、小5・6の時に塾に通い中学受験をして青山に入学した。両親とも、兄が国立の小学校から国立大に進んだのと比べても「トータルだと青山に行っても学費は同じ」との寛容な考え方であった。

短大に進学を決めたのは、姉が青短英文科卒で結婚をし、自分も同じような将来を想像したからとのこと。とくに中高においては礼拝は毎日守られるが、短大では参加は自由になることを知り、その自由さに憧れた。受験科目の関係で、苦手な数学のない児童教育を受けることにした。面接官は幸田三郎学長、高等部の担任は物理の綿引先生で、綿引は後にさゆり会（校友会の女子短期大学部会）の会長となった。

f. Fさんは、もともと都立志望だったが試しに受験したところ両方合格し、ブレザーの制服（1960年に制定）と立地に魅力を感じて青山高等部を選んだという経緯がある。中学の英語（ESS）の顧問が青山の英米文学科の出身で憧れもあった。宗教は不問で

あったことも入学のハードルを下げたという。

短大に進路を決めたのは高等部で習った先生が青短に移籍したことが大きく、当時は大学よりも短大の方が偏差値は高かったことも決め手となった。バスケットボール部に所属していたため日々の練習や合宿で忙しく他大学を受験することは難しかった。なお高等部から男子は他の大学へ行くのが普通で、Fさんのクラスでも慶応義塾大学に行く生徒が数人いた。女子は青山へ行く割合が高かった。

2. 青短に入学して何か自分に変化があったか。あるとすればどんなところか。 何か影響があったとしたらどんなことか。

a. Aさんにとっては向坊学長の「花嫁学校だと思われている短大だが、そうした日本の社会を見返すべく頑張ろう」という言葉が強いインパクトを持って迫ったとのこと、それがその後の彼女を支える動機となったことは想像に難くない。

家政科では料理と裁縫はもちろんのこと、「頭のいい家庭婦人を作る」「科学する学科だ」と化学と物理も厳しく教えられ、それが栄養計算などに役立った。就職活動の際には、まだ短大への就職募集が少ない頃だったので向坊学長自ら「私もできるだけ会社回りをしてみる」と熱意を示されたことが大変嬉しかった。青短ではこうした熱心な教育者に囲まれ、何でも駄目と思わずやってみることで、また五感を働かせ、寡黙にならずよくしゃべることが人間関係の構築には大事であると学んだ。

学生生活の面では、高等部では卓球部に入っていたが短大では習い事に忙しくサークル活動には参加しなかった。

b. Bさんは高等部と短大時代では大きく環境や雰囲気が変わったと思ったという。大学に進学した人とは構内で挨拶はするものの、つき合う友人グループが変わってしまった。青短の素晴らしさの根底にあるのは誇りである、と思われる。当時の国文の教師陣は世間的には高名な人が多かったにもかかわらず、加藤楸邨や諸橋轍次は穏やかでおっとりした人柄で何があっても叱ることがなかった。Bさんたち学生も授業中はまじめであった。ゼミは川瀬一馬を選んだ。授業では論語が面白く、後に教科書を開いたところ漢詩を書きつけた紙切れが出てきたほど熱心に授業を受けていたことが偲ばれた。

c. Cさんにもっとも大きな影響を与えたのは加藤楸邨ゼミに入ったことであった。高等部から入学して加藤ゼミに入った学生はCさんひとりで、他は地方からの学生であった。加藤の薫陶で俳句作りを始め、ゼミ旅行では二句選ばれたことが大きな印象を残している。また彼のアドバイザー・グループ（青山では「アドグル」の呼称で知られる教員と学生の交流単位）にも参加し、アドグル生20名で緑ヶ丘の先生宅を頻繁に訪れ、千代子夫人にもお世話になった。加藤ゼミでは卒論制作があり、芭蕉をテーマに書いた。後にゼミ卒業生であるCさんの結婚式に加藤楸邨が出席し、「空の青きたりていよ白牡丹」の句を披露している。加藤にとっても印象的な教え子であったことが想像できる。

d. Dさんには児童教育という新しい学科の若い教員が青短の最大の魅力で、自主的に勉強するようになったという。先のCさんの例を見てもわかるように、英文・国文の教員は旧制女子高等部の流れからきた著名だが高齢の人が多かったのである。それに比べて児童教育科一期目の教員の年齢はフレッシュさがあった。例えば幸田学長は30代、掛井五郎は20代、高橋好子は30代で着任2年目、瀬田貞二がやっと40代である。当時は各教員用の部屋がなく、ピアノ室の奥の部屋に教員がたむろしており、学生も自由出入りという自由な雰囲気だったことは重要な記憶であると思われる。

また林三平の「2年で散り散りはもったいない。卒業生からの情報も引き続き欲しい」という発言にインスピレーションを得て、「さゆり会」と並行して児童教育科独自の同窓会に当たる「童友会」(1964年～)を立ち上げたことは青短に入学して受けた教育の最大の果実であると思われる。10年後の1974年に設立された「短大同窓会」に合流するよう促されたが童友会は解消せず「学科会」を設けることにし、さらにその10年後には全学科で「学科会」が立ち上がった。この児童教育科の学科会の活躍は目覚ましく、ときの同窓会会長に「他の学科に良い影響を与えた」と言わしめているほどの成功を取めたのである。

e. Eさんは、自分の意識としては高等部から短大へ進んでも特に心持は変わらず、テニスに打ち込んでいたとのことである。しかし在学中には気づかなかったが、「素敵な大人」に出会ったことがその後の人生に大きな影響を与えたと思われる。短大の教員の発言はインパクトが強く、記憶に残っているものが多い。掛井や瀬田が繰り返し伝えた「こどもに本物を」というメッセージはその後の指針になっている。

「世界は大変なのに君たちはなぜそこに座っているのか?」といった挑発的な発言も辞さなかった掛井先生には当時は反発も感じていた。また、「きちんと保育や芸術理論を習いたい」と新しい児童教育科の教養主義に反発する学生もいたことは否めない。林三平先生[1964年11月刊行の『青短紀要』に掲載論文「改訂幼稚園要領の特質」あり]による『母と子の世界』(シモーヌ・ファビアン著、今野一雄訳、1963; 原題 *Nous, les parents... : recit*, 1960)の紹介があり、卒業後も折に触れ「行動の表面だけでなく奥を考える」という教えを思い出すという。

f. Fさんは高等部でバスケットボール部の部活に明け暮れた反動から、短大ではのんびりしたいと願いサークル等には入らなかった。高等部からは通学環境なども変わらず、受験をしていないためのんびりしていた。

授業は70分が7時間あったと記憶する。高等部では帰りにお腹がすき過ぎ練習後渋谷で甘味を食べに寄るなど青春を謳歌した記憶もあるが、短大では授業が長いため帰りが遅く、遊ばずバイトもせずじまいであった。家の近所で英語の家庭教師をした程度である。母の実家は仏教の寺であったが、短大で礼拝には真面目に出席していた。キリスト教の礼拝は印象的で心が落ち着くのを感じてはいたが、若くて教条などへの反発もあり受洗には至らず。

3. 特に記憶に残っていること (先生、友人、ゼミ、授業、礼拝、学校生活、学生活動、寮、その他)、 学生時代のキリスト教教育・礼拝の様子と、卒業後に与えた影響。

(高等部卒業生のみ対象の質問：地方出身の同級生に対する (当時の) 印象は。距離感があったか。そしてどんな交流をしたか。)

a. Aさんは「青短につながるきっかけを得た人はラッキーである」と痛感したという。短大卒業式の謝恩会で友人5人とともに琴 (『千鳥』) を演奏したのは良い思い出である。地方出身の同級生に対しては、お金持ちが多いという印象をもったとのこと。シオン寮生については、洋服の数が多いという印象をもった。寮生は電車ではなく徒歩通学なので、おしゃれな当時流行りの膨らんだスカートで登校していたのである。それに対して高等部からの内部生は、青短が世間一般に言われているような華美で裕福な人の花嫁学校であると思われたくないと、内心苦々しく思っていた記憶があるという、Aさんの非常に率直な発言があったことは貴重な記録となる。とはいえ、確かに東京出身の高等部生には、歌手の淡谷のり子を母に持つ同級生など、有名人の子女が多く、華やかな雰囲気があったのも確かである。

b. Bさんは、短大の記憶の大部分を占めるものとして教師陣の素晴らしさをあげている。やはり諸橋徹次、加藤楸邨、川瀬一馬の名前が挙がる。諸橋は授業でひとりひとり当ててゆくが、優しくかった。このたび教科書を久々に開いたところ多くの箇所に赤線がひいてあり、熱心に授業を受けていたことがわかる。川瀬ゼミでは、卒論のテーマに『花伝書』を選び、毎日図書館に行き筆写していた。川瀬は静かな人柄で冗談などは言われないが親身で、卒業の際にはBさんを自宅に招き世田谷名物の稲荷寿司を振る舞われたという。馬越には源氏物語を教わった。

加藤楸邨のクラスでは1年生の6月に一週間ほどの北陸旅行があった。実際は芭蕉の名跡を訪ねたのだが、勉強不足でただの旅行としか考えていなかったとのこと。この時初めて益子から新潟へ出て日本海側をバスで旅行した。父から「4月に入学金を払ったところなのに、もうそんな大きな旅行に行くのか」と驚かれたものである。しかしこの旅行のおかげで5人の後まで長く続く友人グループができた。2年次には卒業旅行で京都に行った。長谷寺、永平寺を訪ねたのが強く心に残っている。先の友人らとともに東尋坊にも行った。

他に学生生活においては、大学部に階段教室があって勉強しにいった記憶がある。また友人の代返をしたこともあるが、自分で教えるようになってからは代返はバレルものだと気が付いた。部活は入っていなかった。短大での礼拝の記憶はあまりなく、銀座教会にはときおり行っていた。アルバイトは明治生まれの母のもとでは許されなかった。当時はアルバイトとは経済的に困窮した人がやるもの、というイメージがあったとのこと。必要な人には短大が斡旋していたように記憶している。その業種はデパートでのお中元・お歳暮

の販売バイトが一般的であった。

地方出身者については、当時の青短には地方のエリート家庭のお嬢さんばかりが来ている、という印象だった。クラスに東京出身者は10人未満で、Bさんたち5人が「幅を利かせていた」が、あとは北海道から九州まで、おとなしいお嬢さんばかりであったとのこと。彼女たちから見ればBさんら5人は「東京の人は派手でうるさくて、勉強もしないのに笑ってばかりいる」と思われていたであろうという率直な回想あり。全員国文科で、3人は高等部から、二人は有名な女学校からであった。64年間途切れず仲良くしており、年2回は会っている。その間結婚して子どもが生まれ、ベビーカーもない時代に赤ん坊を抱っこして電車に乗り友人の家に行ったほどの親しい絆で結ばれている。短大がその初期から、必然的に高学歴女性となる卒業生たちに「女性同士の絆」という貴重な財産を授けたひとつの証と言えるだろう。

卒業後は定期的に短大のクラス会を開催し、20名ほど集まっていた。場所は青山校友会館あるいは水戸や九州などの地方で行われた。クラスメートの喜寿にはお祝いの会を設けていたが、地方の方がその都度東京まで出向くのは大変であろうと、2年のうち一度校友会館に来られる人だけだと決めた。ちょうどコロナ禍に入る前まで行っていた。一方Bさんら高等部出身者を含む東京出身の5人の喜寿のお祝いの会は帝国ホテルで開かれ、25人ほどの参加があったという。シオン寮生との交流は、旅行の折には仲良くなった程度と希薄である様子がうかがえる。

c. Cさんの学生生活にまつわる思い出は東京の地の利を享受した、いわゆる華やかな都会の私立大学のイメージに合致する。昼は主に学食でとり、帰り路に友人たちと「千果園」というフルーツパーラーに寄っている。また中高の続きで（短大にもあったのだが）学院大学の方の演劇部に入部して、ここでの活動が主な生活になった。「四年制だと部内に年上の男子学生がいて威厳を感じた」という。地方出身の友人は各地方出身者用の下宿に住むか、あるいはシオン寮に住んでいた。当時シオン寮の近くを高速道路が建設中であったことが印象的だとのことで、これは1964年開催の東京オリンピックをひかえて東京の風景が変貌する最中の貴重な証言である。

キリスト教との関わりに関しては中等部でのキリスト教との出会いが大きく、その後も聖書を持ち歩き続けた。2011年、夫の兄が東日本大震災の津波で亡くなったことを契機に富士見町教会で受洗し、現在は同教会の婦人会会長を務めている。

d. Dさんの学生生活にまつわる記憶に残っていることは、旧短大校舎が木造二階建てであったことで、現在の大学図書館あたりに建っていたものである。Dさんは入学式に私鉄のストで参加できなかったことも印象に残っているそうで、地方出身者は地元から親がかりで式に参加していたとのこと、東京出身者のセレモニーに対する一種の気楽さが見て取れるかもしれない。

印象に残る教員は、まず瀬田貞二で、授業のたびにザックから絵本を取り出し、「いいでしょう？」と得意げに紹介された。英語の押韻まで丁寧に解説される良心的な先生だっ

たが5～6年で体調を悪くされた。「卒業しても勉強は続けてほしい」という瀬田の言葉はその後のDさんの人生の指針の一つになっている。掛井五郎には油絵を習い、対象をよく見ることを繰り返し強調されたのが印象的。園芸家・園芸評論家の柳宗民（民藝運動の創始者柳宗悦の三男）は、母親の影響だそうだが畑に花を植えるのが習慣だった。いつも何かを持ち運んでいるので、ポケットがいつもばんばんに膨らんでいた。

地方出身者に対する当時の印象は、緊張感をもって過ごしていることが感じられる、ということだった。高等部からの内部進学者の数は70名中5名であるにも関わらず、多数派である地方出身者のほうが緊張していたとは一見不思議だが、地方出身の友人は「親戚の家に住み、方言が出ないよう話し言葉に気を遣っていた」と回想していたそうである。シオン寮生は当時あまり周囲にいなかったため、東京の自宅生であるDさんはあまりその存在を感じていなかったとのことで、後年栗坪学長時代に同窓会の講座の会場としてシオン寮を使用させてもらい、その折に卒業生の中にシオン寮愛が強いことを初めて認識したとのこと。

e. Eさんの学生生活に関する記憶はまずテニスに打ち込んだことで、のんきな学生だったと回想する。印象的だった教員は瀬田貞二で、彼は太平洋戦争のとき衛生兵だった経験から、深い反省をもって戦争の起きない世を目指し、後進を育てる決意から平凡社の『児童百科事典』（1951年刊行）を編集したことはよく知られている。多くの卒業生と同じくEさんにとっても、瀬田の「こどものために本物を」、掛井の「こどもの芽を摘むのは大人」といった言葉は、子どもと対する時、考える時の核となっている。キリスト教保育の小田島もよく話を覚えている。Eさんの実家の宗教は仏教なので「青山はキリスト教を強制されないのがよかった」「宗教教育を受けることは大事」と親の宗教教育観が強く影響しているのが分かる。Eさん本人としては、キリスト教が絶対神信仰なのが疑問で受洗にいたらなかった。本人はきわめて感覚的にだが、と添えておられたが、父親がなくなったときにはイエス様よりお釈迦様、父と同じところへ行くな、と教会より寺へと気持ちが傾いた。

地方出身者については、Eさんの目には雰囲気の違いが見て取れたようで、高等部から短大に進学した人は高校生のとときと気分が変わらない人が多いのに対して、地方出身者の中にはそれが気に障ることもあっただろうと洞察力のあるコメントをしている。シオン寮生については、当時はあまり学生間で交流がなかったとのことである。

f. Fさんの学生生活をめぐる印象は教員にまつわるものが多い。アドグルは短大で人気の荒牧鉄雄のところに入った。15～6名ずつ自宅へ招いてもらい、夫人の手作りサンドイッチを庭でいただいた。また堂賀島への泊まり付き観光旅行にも連れていってもらった思い出がある。他にはジュリア・サッチャー先生、松宮先生が印象に残った先生で、教員と一緒に北海道旅行に行き、青函連絡船の船底で船酔いした記憶がある。

地方出身者については、勉強に意欲的なのが非常に新鮮に感じられ、自分たち高等部からの内部進学組に比べて精神が大人であるように感じられたという。

4. あなたにとって青短とはどんな場だったか

a. Aさんは青短を人生のすべて、と表現している。教育熱心な教員との出会いを筆頭に、自分より若い世代との交流があり、タテのつながりがその後の人生を豊かにした。卒業後も校友会で大学英文科の卒業生（2年年上）との交流を通して、院長に対しても理路整然と主張でき、母として自分の娘からも敬意を表される、青山学院の先輩方の偉大さを知るようになったという。

b. Bさんにとって青短はいわば次のステップへの通過点であったが、青春を楽しむ場であったのは間違いない。昼休みはボーイフレンドと会い、友人の交際相手も来て会ったこともあった。中高等部時代のつながりが短大に入っても存在していた。

また、地方出身者と初めて出会う場でもあった。方言を使う人や、お姫様のような裕福な家庭の「お嬢様」もいて東京出身の生徒が大多数を占めていた高等部とはまったく異なる多様性を知る機会であった。若者らしく、方言の真似をしたり互いにあだ名をつけたりしたこともあった。

c. Cさんは青短の環境を学業と課外活動の両面で実り多いものとしたことが顕著である。女性だけの環境を魅力だと感じたという。中等部の藤村先生に聖書を学び、テストのための暗記が厳しかったことを覚えている。中等部内にあったJunior Churchという黒光りする建物の中での礼拝に参加し、土曜日は休みだったので日曜日には教会へ楽しく通った。

なにより青短時代は日舞に打ち込んだときでもあった。当時日舞を習う学生は多く、クラスでも4人いたという。Cさん自身は高等部1年のときに名取となった。

d. Dさんにとって青短は勉強以外にも様々なことを吸収する場だった。たとえば大学水泳部で2年間「飛び込み」競技に明け暮れたが、1964年の東京オリンピック前でもあり、そうしたハイレベルな選手たちと同じプールで泳げた興奮は今も忘れられないという。

e. Eさんにとっては、青短は高等部の続き、といった心持ちの場で、引き続きテニスに打ち込む日々であった。素敵な先生方と思っていたながら当時は受け身一方であったことが悔やまれると非常に率直に述べられている。

f. Fさんは青短を「生涯の良いお友達を得た場所」と定義している。卒業後56年たった今でも15～6名の友人がいる。地方の人も多く、今回のインタビューの下準備に彼女らに青短の思い出を聞いてみたところ、「こうした卒業生調査を実施してくれる青短は素晴らしい」との感想が多かったとのことである。みなお互いに習い事をしており、Fさん自身は早くに夫を亡くした50代から観世流の謡を習っている。これはカルチャーセンターでの一日入学をきっかけに始めたものとのこと。青大の親友と結婚している師匠もあり、青山のつながりが周りに多い。

5. 卒業後の進路について、どのように決めたか

a. Aさんは青短を卒業後よい企業に就職したが、当時は就職するのは経済的に「困っている人」で、Aさんも実家は牛込城址に建つ寺院であるが中3で父を亡くし、経済的な自立と母の支援を願っての就職であった。富士電機（当時ジーメンスと提携。本社は東京丸の内）の秘書として採用されたが、短大卒が採用されたのはAさんが初めてだったとのことで、当時の青短の社会評価の高さが知れる。

Aさんにとってこの就職は、会社キャリアをつけてもらうという快感があった。会社の費用でYWCA主催の各種資格をとらせてもらった。午後6時には退社を許可され、お茶の水のタイプ学校へ通わせてもらい、社長秘書室にタイプライターを購入してもらえた。当時タイプライターは高価で、アメリカからの輸入品が主だったことを考えると会社側の経済的余裕とAさんへの期待の高さがうかがえる。

Aさんの家政科での学びも役立っていることは興味深い。労使交渉で疲れている社長におにぎり等を作って出し喜ばれたことが印象的だという。その他、社長への人事あっせん活動、社長の依頼による社内での「お婿さん候補」社員リストの作成、またAさん自身も高級老舗料亭である紀尾井町福田屋でのお見合いをするなど「短大卒社員ライフ」を満喫したのだった。雇用機会均等法施行後のいまでは神話とも言える明快な性的役割分担を身をもって実践したAさんだが、歴史的観点から見れば、高度経済成長期を目前に、その後の日本社会に広く浸透した短大卒女子社員のキャリアコースに先鞭をつけてくれた、短大卒業生全体にとっての恩人と言えるだろう。

b. Bさんは青短を卒業後、3年間田中千代服飾専門学校に通い、本科・師範科・専門科を修了し、教員としても働いた。合計5年いたことになるが、とにかくおしゃれがしたかったとのこと。アメリカ・ヨーロッパから伝わるファッション熱を反映した、この時代特有の卒業生の若々しい一面をよく伝えている。

友人5人グループのうち、ひとり卒業後すぐに結婚した。当時は25歳までが婚期と考えられていた。それぞれ服部時計店、旭化成、もうひとり父親の縁故で日本ゼオンに就職した。学校の就職案内を使った者はひとりだけで、多くは縁故就職だった。就職して1年ぐらいは勤めたと思われる。

Bさんは父が不動産業に携わっており、三井不動産日本橋室町の地名を聞いていたので、地の利を得て三井生命東京支社に応募し就職した。最初は子育てで時間の制限もあったが、度胸と怖いもの知らずのところがあり、営業で三井系の企業を担当した際、直接一番の上司に挨拶に行き有名になるなど大いに活躍した。指導主任に選ばれ、最後は所長にまで昇進し27年間働いた。

青短は良いところだった、とBさんは回想している。同じような環境出身の学生たちの質が均一だったせいだろうが、人を疑うことのない環境で、人間関係で痛い目にも遭わず、いじめもなく、世の中はこんなものだと考えていた。実社会に出て初めて、ひねくれた物

の見方をする人や仕事のことで妬む、あるいはひがむ人に出会った。青山ではそういったことが一切ない、一種の桃源郷であったということがうかがえる。

青山学院を出たことによって自信がついており、他人が何を言っても構わない、自分は何も悪いことをしたわけではないのだと考えて行動できた。Bさんの父は「人は信じなさい。神様は必ず見ている」と言うのが口癖であったとのこと。夜も「ありがとうございます」と感謝の言葉を口にする習慣が身についていた。

c. Cさんの印象では卒業後就職する人はまだ少なく、友人の中からスチュワーデスの第1・2号が出たという時代だった。他の就職先としては銀座和光、銀行の一般職が多かった。Cさん自身は卒業後、御茶ノ水美術学院（美大専門の予備校）で絵のレッスンを受けていたところ、その知人の勧めで広告会社の秘書になった。

その後は日舞の生徒をとって過ごした。短大時代に入部していた大学の演劇部では、ロシア演劇、シェイクスピア作品、フランスの古典演劇（マリヴォー作品など）、フランスの現代もの（『泥棒達の舞踏会』）などを手掛けることができ、充実した創作活動を行った。

1968年5月に医者の男性と結婚、1967～68年には一時プラハに住んだ。帰国後は夫が仕事や研究のために家に不在で、そのため、妻が専業主婦となって家と夫の世話をするという当時の典型的な結婚生活ではなかったかもしれないが、かえって日舞に打ち込めた時代であったとも言えるだろう。

d. Dさんは卒業後、白金幼稚園に就職を決めた。これも瀬田・掛井の影響が大きかった。林三平先生も心配してくださったとのこと。Dさんの母は愛育病院の婦長だったので就職を探す際に縁故も提示されたが、自立したく断った。児童教育科ながら、幼稚園に就職したのは友人7人中2人と少ないのが事実である（後に幼稚園保育に関わった人は多い）。当時は銀座和光など普通の企業に就職する人が多かった。幼稚園に就職はしたものの、当時は残業も当然のように多く、仕事と家庭を両立できるような社会環境ではなかったため、結婚を機に仕事は辞める。結婚相手は小学校以来通っていた教会で知り合った6歳年上の男性であった（職業は会社員であった）。当時は教会がいわゆる青年会の役割を果たしており、男女の出会いの場として機能していた。二人とも実家が近く、そのまま同じ場所に住み続けたため教会にも70年以上通い続けたことになる。Dさんはこのことを「幸い」と感謝の念をもって表現している。

e. Eさんは児童教育科を卒業したからといって特に幼稚園に就職するとは決めていなかったと語る。それは当時の世間の「児童教育科ということは子どもが好きなのね」と決めつける雰囲気反発を覚えていたためだった。最終的には当初就職が内定していた幼稚園を断り、林三平の紹介先のキリスト教保育ではない幼稚園に就職した。結婚はその園長の甥である男性とすることとなり、会社員であったその夫の転勤に合わせて大阪から東京、名古屋へと転居。子どもが小4時に東京に戻ったのを機に定住する。

f. Fさんの卒業後の進路は当時の青短卒業生のひとつのひな型と言えるだろう。いずれも慶応義塾大学に通う兄と弟に女子はFさんひとり、という構成でのんびりしていた

が、叔母の紹介で東京海上日動火災保険株式会社に就職。その年は青短からの女子社員が新入社員総数の中で最多だった。東京オリンピック開催の年で、皇居近くでランチをとり、仕事中最寄りの銀行にて1000円の記念硬貨との引き換えを初日に出来る機会も得た思い出がある。当時ボーナスは年3～4回あった。主な仕事としては自動車保険の原資の作成でデータを数字化してパンチに回し、そのデータを計算機に読み込ませて統計表を作る作業を行っていた [パンチカードシステムを使った磁気計算機 (第2世代) (メインはIBM製) は集積回路を用いた電子計算機 (第3世代) が登場する前に大型データ処理に使われていたもので、1970年代以降、急速に電子式コンピュータへと置き換わった。Fさんの東京海上でのパンチ式システム作業の話は第2・第3世代コンピュータが共存していた時代の貴重な証言である]。丸ビルから国立市へ一時移転した時期があり、このときベテラン社員が大量に辞めたため比較的若い人が昇進したという痛快なエピソードがあった。Fさんは5年勤めた後、結婚を機に退職し、夫の転勤によって流山市に移住し40年ほど住むことになる。

6. 同窓会の二本柱「生涯教育」「ボランティア」に関する補足

a. Aさんは計16年間校友会などに参加し、伊藤徳子氏など代々の同窓会長を補佐するなど、青短の同窓会に長年熱心に奉仕された。80代になった今は連れ合いの認知症が始まる年代であり、同窓会の仲間と普段うちに秘めていることの多い介護ケアや自身の身の処し方の悩みを分かち合い話し合えることは大変な恵みである。短大がなくなっても同窓会の活動は続くのであり、これからも同窓会の成果を内外に伝えてゆくことを使命と考えておられる。またAさんは昨年 (2022年)、オンラインで河見誠教授の講演を聴講し、コロナ前に実施された学生との海外スタディ・ツアーや20～30代の卒業生の様子を垣間見ることができた。こうしたオンライン利用によって外出の難しい子育て世代やシニアのつながりが可能になる点、海外スタディ・ツアーのシニア版があれば継続的な学びと交流が可能になる点に期待している旨を逆提案してくださりさえした。その生涯学び続けるという熱意には、草創期の青短が生み出した、高等教育を受けた女性のロールモデルを見る気がする。

b. Bさんは当時の大企業におけるキャリア女性のひとつのロールモデルとも言える存在で、生命保険会社の所長にまでなったため仕事が忙しく、短大バザーなどの同窓会活動に加わったのは60歳過ぎてからだった (高等部の同窓会幹事は10年ほど務めている)。

c. Cさんのボランティア活動の原点は高等部のとき、クワイヤーで山谷を訪問したことだという。クワイヤーでは当時病院訪問も行っていた。生涯教育の点では、2005年あたりから6年間、国文学科会の会長を務めた。当時の幸田学長の「2年間の短い教育期間ゆえに生涯教育としての同窓会 (学科会) を大切にすること」という励ましがCさんの行動規範に大きく影響したと述べている。

d. Dさんは卒業後も何かの形で社会に関わりたいと願い、子育て中はPTA、食品公害が社会問題になった〔例：1968年カネミ油症事件など〕ときは生協を立ち上げ、教会にも通い続けた。この教会は、自宅近くの教会付属の幼稚園に祖父と両親の意向で入れられたもので、その後も教会学校で育ち、青山の中等部・高等部での毎日の礼拝で信仰を養われ中等部2年次のクリスマスにこの教会で受洗している。生協を退いたタイミングで短大の同窓会に誘われ引き受けた（1990年代～）。同時期に校友会副会長も務め、同窓会会長を辞めた後は教会での奉仕を中心に現在まで生活している。自身と夫の両親計4人と夫の介護も経験した。公的・私的生活にわたって超人的な活動ぶりと思われるが、幸田先生の「置かれた場所で最善を尽くす」という言葉を心の支えとしてきたとのことである。

e. EさんはDさんの依頼に応じて同窓会2期目に書記を務めた。同窓会運営委員をやるかたわら、37歳のとき児童教育科2期生の後輩からの情報で関わることになった自主保育施設「こぐま園」（心臓病児のための保育）の保育士になった。この保育園は病児を保育園・幼稚園に預かってもらえない当時の多くの母親の念願に応えたものであり、美濃郡都知事（1967～79）の時代に補助金を獲得している。この「こぐま園」は渋谷区の集会所を借りているのに利用者には区民がいない等のクレームがつき閉園の危機にも遭ったが、Eさんら保育士・父母会・後援会会員らが署名活動を展開して乗り切った。今年で創立50周年を迎え、週2回（月曜と木曜）開園している。79歳の現在42年目になる。

童友会の幹事は46年目となる。中軽井沢親睦会・学科会の学習会の世話役を「せっかく始めたことを止めるのはもったいない」との思いから長く務めることになった。こうした点を他の同窓生からは有難く、頼もしく思われているとの感触が同行された友人からの発言に感じられた。

f. Fさんにとってのボランティアはまず、青短同窓会への参加である。2000年から同窓会の運営委員になり4年間務めた。Kさんと一緒にボランティア係、主にバザー係を請け負い、後に大人気を博した「手作りの会」を立ち上げたのもFさんで、バザーで売る製品の制作・販売・基金分配を行った。その年青山祭での売り上げ総額が200万円を越し、青短やあしなが育英会、CCWA（里親として）、福祉協議会などに寄付できたことが大きな誇りとなっている。その後同窓会のバザー委員長を2年務めた。四国支部（高知）の総会にも出席して歓待され、金毘羅歌舞伎の貴重なチケットと卒業生の先輩の旅館への宿泊を手配してもらったことが良い思い出で、「短大卒業生はファミリーだ」と感激した。

他には「いのちの電話」やフィリピンの子どもの経済支援も数年に渡って行った。生涯教育の点では謡を続けている。

7.（今振り返って）自分の人生にとって「青短」とは

a. Aさんは青山学院女子短期大学につながる事が出来た「お導き」に感謝している。後に青山キャンパスに近い住宅地・南平台にマンションを購入し、長女が初等部から中等

部まで青山学院に通うことになった。毎週日曜日に彼女が通っていた聖ヶ丘教会の山北宣久牧師が、30年後青山学院院長となり、同窓会活動を通じて思いがけず再会する幸運に恵まれたことも青山学院の不思議なお導きだと感じている。同窓会活動の中で、青短前身の女子専門学校同窓会さゆり会（2008年解散）の運営委員とお話する機会があった。「私たちは女子高等師範学校と同じレベルだったのに短大に格下げされて悔しい」「女学校をつくられたスクーンメーカー先生の正統な後継者は（男女共学の四大ではなく）短大の私たちの方なのに」と憤慨しきりの様子に先輩方の強い気概を感じつつ圧倒された。

b. Bさんにとって青短とは生涯続く友人関係の基礎を築いた場所であった。短大に馴染んでもいない入学したての頃の研修旅行と卒業旅行とがあって出会った友人たちとは卒業後64年たった今でも強く結ばれており、みんな明るく元気な人々である。

c. Cさんにとって青短とはまず加藤楸邨との出会いの場である。青山で学んだことは「頼まれれば必ず助けるべし」という指針であった。そのため常に人から頼られる人生であったが、「根拠のない楽天主」(国文学科会委員、会長時代のCさんの人物評であるとのこと)でいられた。それは青短で加藤先生が初めての俳句を褒めてくれ、人間として先生と同等の人間と認められたという深い自己肯定の経験が根底にあるからであろうか。また、その後も同じ「芸」をする者同士として語り掛けてくれ、「能天気でもよし」と存在のすべてを肯定されたことが一生の宝となった。1992年の加藤楸邨記念館オープン時には記念に「虚空の雪」を披露できたことが良い思い出であると述懐している。

2010～11年には、校友会中央支部に日本の伝統芸能を発信する「緑伝会」を立ち上げる。これは校友を動員して芝居を実際に観に国立劇場に連れてゆくのが主な活動の組織で、伝統芸能に縁がある生徒・学生が多い青学に相応しい活動である。その他「歌舞伎体操」を考案し、YouTubeで発信するなど、高齢者の健康維持、気分転換に資する活動を行ってきた。

また特筆すべきはコロナ禍のさなかにあった2020年に、東京オリンピック開催にちなんで「輪五の舞」を創作、日舞・中国舞踊・スペイン舞踊・韓国舞踊・現代舞踊を融合させた創作舞踊活動団体 Peace by Dance を田中いづみ（モダンダンス）と共に創設したことだ〔2020年1月には練馬文化センターで発足公演、2023年1月にはシアターX（カイ）で「生命の樹」の公演を行った。また2023年11月には徳島で文化庁助成公演を行った〕。

d. Dさんにとって青短とは、自分の核になる部分を形作り、「きちんと自分の前を見ること」を学んだところである。

e. Eさんにとっての優先順位は1番目が病児保育の「こぐま園」、2番目が青短の同窓会の仕事、という発言からも青短の占める高い位置がうかがえるだろう。どんなことであれ「出来ないことを出来るようにしたい」という強い思いがあるのは青短で学んで以来であるとのことで、これは児童教育科創設当時の教員の面目躍如である。さまざまな局面での困難にも関わらずEさんを支えてきたのは「子どもに少しでも良い環境を残してあげたい」という気持ちからだというのが、ここにも「子どもにこそ本物を」といった児童教育

科の教育指針が響いているように思う。また、長く保育に携わってきた中で、母親の性質が変わってきたように感じるとのこと。かつては子の不利益に対して母親はしっかり戦う存在だったが、今の母親は情報過多で不安な人が多く、精神的に脆くなっている、とのEさんの観察である。

f. Fさんにとっては、青短は多くの人生の友を得た「ふるさと」であると感じられている。青短に娘を行かせた家庭環境や要素に目を向けると、Fさんの母は世田谷区弦巻の実相院という曹洞宗の寺院の長女であり、自身は共立学園専修科（鳩山薫教授に師事）出身であった。当時は女中もいたが長女である母は手伝いを厳しく言いつけられ、手伝いを怠れば本を読んでいても叱られたという。Fさんの父は文部省務めの経済博士で、5か国語を話すことの出来る優秀な人物であった。

8. まとめ

a. Aさんの増上寺の高僧でもある祖父の「心根があれば何の宗教でも」という言葉に象徴されるように、当時の都心には宗教を越えたコミュニティがあったことを証明する貴重なインタビューである。また裕福な地方出身者の華やかな服装を見て「花嫁学校と思われない」「一緒にされたくない」という誇り高さが感じられ、都心の高等部出身ならではの生き生きとした女学生の心意気がうかがえた。同時にインタビューを行ったFさんとも5歳の年齢の差にかかわらず尊敬と親しみを抱き合う関係が見え、当時の青短卒業生同士が、多様な背景にもかかわらず創設初期の熱意に満ちた女子高等教育をうけた者という共通項で結ばれたシスターフッドの貴重な場を形成してきたことが理解された。こうした方が華やかなお人柄と豊かな人間関係を惜しみなく青短の同窓活動に注いでくださり感謝するとともに、多くの卒業生から家族ぐるみでの愛情を注いでいただける青山学院という存在をこれからも、短大閉学如何に関わらず大事に伝えてゆく責任を痛感させられる。

b. Bさんは中等部から青山学院で過ごし、高等部とのつながりが強い。青山では「みんな同じような環境の人だったから人を疑うことがなかった」という言葉が、その若く人生経験が浅い時期ゆえの純粋さで印象的である。とはいえ、当時はまだ珍しかった育児とキャリアの両立のご苦労があったはずであるが、青山で培われた他者を信頼する性格や自分を頼む強い精神、神を信心する父の教えなどが見事に融合し、自分に正直になるためには苦境をも辞さない純粋な性格の基盤となったと思われる。クラスの多数派を占める地方出身者に対しても「地方の人＝お嬢様」といった比較的素朴で単純な印象を持ったにすぎず、在学中は旅行中をのぞけば積極的に交流することはなかった様子である。一方でコロナ禍まではクラス会が定期的に開催され、クラス全体の繋がりは近年まで保たれていたことがわかり貴重な証言が得られた。

c. Cさんは教育や宗教に関して自由な考え方を持つ両親のもと、青学の中高等部時代から渋谷へ通い、短大での学びと四年制大学でのサークル活動と社交を謳歌し、卒業後は

当時珍しい高給の就職をする。多くの場合卒業後即結婚を求められる地方出身の卒業生とは異なる、典型的な東京の都市部出身者という印象を受ける。ただし、その後の人生においては、医者の妻でも経済的に苦労があったなどのエピソードもありながら、その時々で周囲の人を無償で癒し助ける包容力が非常に印象的である。日舞の舞踊家というアーティストとして精進してゆく意志は主婦としての生活の空疎さに逆に支えられた、と気負わずさりと語るあたりは、彼女の個人的資質も大きいと思われるが、短大以前に中等部で出会っていたキリスト教と、短大で確かな教養の基礎を築いた、という自己肯定感が大きな精神的支柱になっていることは明らかに思われた。

d. Dさんのような同窓会会長まで務めた短大愛の強い人物を生み出すにはどのような要素の出会いがあったのか、大変興味深いインタビューであった。Dさんの場合それは、比較的裕福で母親も婦長というケア仕事に従事し、結婚後も社会とつながる仕事に就くのがあたりまえ、と感じさせる家庭の雰囲気特徴的で、そこに青短の児童教育科第1期目の教員たちの熱意が強く働きかけた、幸せな巡りあわせによる教育の果実だと言ってよいのではないかと。家庭を回すかたわら生協の立ち上げや、同窓会学科会の前身である童友会の設立と運営をこなすなど、大変な組織力と実行力を備えておられることがうかがえるが、その大変さを感じさせないのんびりとした温かい口ぶりに惹きつけられ、協調してくれる友人が多くいることをうかがわせた。

e. Eさんは、同日の午前にインタビューしたDさんのご友人ということで、午後に分けてお話を伺ったが、時折お互いに記憶を確かめ合う様子が微笑ましく、高等部以来の信頼関係の厚さを感じさせた。批判精神も旺盛な方で、幼児教育におけるキリスト教教育には反発したものの、児童教育学科の教員の熱意に応え、とくに掛井先生・瀬田先生の「子どもに本物を」という思想に大きく影響を受け、その精神的果実を見事に実らせた後半生である。Dさんの生協活動と同じく、病児保育も60～70年代当時には非常に新しい概念だったと思われ、この立ち上げ運動もまた驚くべき組織力と行動力が求められたはずで、この時期の児童教育科卒業生の社会貢献度の高さは特筆すべきものと思われる。

f. Fさんの人生は端的に言って、当時の青短の英文科卒業生のひとつの社会的イメージを見事に具現化したものに見える。東京オリンピックの年に花形の企業であった大手保険会社への就職、経済高度成長期ならではの華やかな勤め先での活躍、また結婚後も同窓会活動に積極的に関わりボランティア事業部委員長を務められるなど、まさにこうした先輩の存在こそが青短の社会的ステータスを高めたのみならず、女子大生の可能性、女子社員の実力の価値を社会に周知せしめたものであった。

おわりに

これら6人の高等部出身短大卒業生への聞き取り調査を通じて痛感されたが、いまだ教育の価値よりも結婚の成否が重視された当時において女子でも高等教育を受けられたの

は、彼女らの両親の教育方針が大きいことは間違いない。戦後の第二の創成期にあった青短を支えた教育資本の重みについて、あらためて思いを巡らせる契機となる今回のインタビューであった。卒業生個々人の人生においても、青短での交友関係は一生続く精神的にも濃い交わりであったことが印象的である。